

# 重度重複障害児教育研究

Preferred Education for Children with Multiple Handicaps

北 嶋 淳

## 目 次

人間一般からとらえる重度重複障害児の教育評価.....	100
-----------------------------	-----

## 人間一般からとらえる重度重複障害児の教育評価

北嶋 淳

### 1. グループ設立の経緯

平成17年度に行なわれた、第34回肢体不自由教育実践研究協議会では、文科省の指定研究「肢体不自由教育における小中高の教育計画と評価」の研究協力校として、本校では「学習が困難な児童生徒の教育的ニーズに応じた指導の実現を目指して」、施設併設学級では「自立活動を主として学習する児童生徒の教育的ニーズに応じた指導の実現を目指して」と題して、それぞれに研究成果が発表された。

施設併設学級では、重度重複障害児の評価システムについて、実態把握から評価基準へ至る道筋を、「構造に入った実態把握とそれに基づく指導のありかた」としてまとめ提案した。

その詳細は、既に昨年度の研究紀要（第42巻）に述べてあるが、その骨子を再録すれば以下の通りである。「一般に、評価は評価のみを問題としても成り立たず、実態把握－計画（目標設定）－指導－修正－評価という一連の過程の中でその意味を持つものである。それにはまず、評価システムの大本にあたる「個の実態把握」をしっかりと行っていく必要がある。それをいかに為していくかと言えば、その内容をただ単に現象的な段階にとどめず、一歩踏み込んで、子どもたちのあらわしている姿に「人間一般」を重ね、その構造を把握する段階にまで推し進めていけば、子どもたちの可能性が見えてくるのではないだろうかと考えた。また、指導に当たっては、学習の構造に踏み込んで、学習ができる土台となる「からだ」と「あたま」づくりをした上で目指す学習をさせていく、いわゆる『つくって・使う』指導を行う大切さに気づいたのである。」として、構造に入った実態把握と指導をおこなった事例をあげ、その有効性を発表した。

こうした提案をおこなったところ、この必要性に気づいた参加者から多くの賛同を得た。その二、三の例をあげれば、「構造に入ってとらえる実態把握についての考え方にはとても共鳴した。表面的に見ている部分の実態把握しかされないことが多いと思うが、そのことの本質と、子どもがそうしていることの意味を考えることが本当に大事なことだと思った。確かな実態把握と目標設定につながるものだと思った。」「実態把握の根拠を『人間一般』に求めることで、複数の教師がいても揺るぎないものになると感じました。このような話し合いがもてると、個別の教育支援計画も個別の指導計画も生きて使えるものになり、共有性がもてるのだと思いました。」、あるいは「指導の二重構造にある、『つくって、使う』というのが、一見当たり前のように思えたが、実はそれはとても大事な事に気づかされた」などである。

提案に賛同するこうした感想や意見は、参加者の大部

分から寄せられており、重度重複障害児の適切な教育計画と評価を為すためには「対象の構造に入った見方と指導の仕方」が不可欠であることを改めて思わされたのである。

こうして研究協力校としての活動は終わったものの、重度重複障害児教育の実践的指導の体系化をはかるうえで、『人間一般』から教育過程をとらえていくこの研究は、多くの現場の教師の興味を引き、この継続研究を求めていることもわかったため、文科省の指定研究の継続研究を行おうと意図した有志が集まり、グループ研究を立ち上げたのである。

### 2. 研究の目的

この研究の目的は、「人間一般」「教育一般」から「対象の構造に入った見方と指導の仕方」を導き出し、それをもって重度重複障害児の適切な評価の構造を提示するとともに、重度重複障害児教育の実践的指導の体系化を模索していくものである。

そもそも学問とは論理の体系化によって生じるものであることは誰も知っているところであるが、しかし、念のために申せば、その成立過程は、まず一般論の提示に始まり、その一般論に専門分野における事実を重ねて構造に入り、そうした繰り返しを経て構造論を作り上げ、さらにそうした上り下りの過程を繰り返すことを経て、一般論が本質論に転化したところで、「本質論」「構造論」「現象論」をもって学問が成立するのである。

ここで私たちグループで確認している一般論を提示しておけば、次のようなものである。まず人間とはであるが、「人間とはすべてにわたって教育されてはじめて人間となる存在である」であり、教育とは「そもそも教育、とくに学校教育の目的の重要事は（一）に文化遺産の継承であり、（二）に新たな文化の発展をもたらす基礎づくりにある」であるとした。次にこの一般論を踏まえたうえで、障害を負うことについては、「障害を負うとは、実体及び機能上の不可逆的な変化によって、そのままでは環境との正常な相互浸透ができにくくなる」とことと捉え、さらにその上で、障害児教育を次のように概念規定した。すなわち、「障害児教育とは、成長過程における障害による認識（=像）のゆがみを最小にするように環境を整えながら、文化遺産の継承を可能な限り大きくさせていくことにある」としたのである。

私たちは、この一般論を持って構造に入っていこうとするものである。

ここで一言ことわりを述べれば、前者「人間とは」「教育とは」の一般論は他から教わった、いわば借りてきたものであり、後者「障害を負うとは」「障害児教育とは」は自分達の力で導き出してきたものである。

さてここで、一般論を事実を重ねて「構造に入る」とことは、専門性を保証するものであると言えるが、学問の構築にまでは至らなくとも、一般論をふみはずすことな

くその構造に入って現象を捉えていく事ができれば、教育において少なくとも大きな間違いをしないで、子どもたちの成長をはかれるものと思う。そうした大切さを事実をもとに確認し、提案していこうとするものである。

### 3. 研究方法と内容

方法は学問的方法論を採る。それは上述のように、一般論を提示し、それを事実を重ねて構造を明らかにしていく方法である。

具体的な研究内容は以下の三つの柱に拠る。

- (1) 学問的方法論の研究。
- (2) 「対象の構造に入った子どもの見方と指導の仕方」(桐が丘特別支援学校研究部主催講習会)における現職教員への講習。
- (3) 現職教員、看護研究者、障害児教育研究者との共同研究。

### 4. 研究経過

(1) についてはグループにおいて、「薄井坦子著『看護学原論講義』、現代社」と「瀬江千史著『育児の生理学』現代社」の読み合わせを行っている。これを読むのは、既に看護学において学問体系が構築されているからであり、学問の構築過程にある医学を知る事ができるからである。目的と内容は違っても、学問の構築過程において、看護学、医学の成立の筋は、障害児教育の体系化を図るための導き手となると考えたためである。

(2) については、第1回目を平成18年11月に、第2回目を本年8月に行なった。

その目的と内容は以下の通りである。

目的を講習会の案内文より引用すると、「平成17年度研究協議会施設併設学級分科会で提案した『構造に入った実態把握とそれにもとづく指導の仕方』の内容を、ワークを交えてより具体的に展開するものです。私たちは、障害の重い子どもたちにとって必要とされることは、健康を自らの力で守る力を育てていくこと、および外界を把握する力を育てていくことであると考えています。その実現のためには、子どもたちがあらわしている姿の理由を構造に入ってとらえ、指導を行っていくことが不可欠であると考え、その具体的な方法を提示し、ワークを行います。」とし、内容については次のようであった。

(平成18年度)

- ①「対象の構造にはいった捉え方とは何か」(千葉大学看護学部教授山本利江氏より)……障害を負った対象を看護の立場ではどのようにとらえるのか、看護と教育の対象への捉え方と関わり方の違い、回復をうながす刺激としての触感覚の重要性などについての講義。
- ②看護研究者(山本利江氏)、障害児教育研究者(石井麻子氏)、障害児教育実践家(小川原芳枝氏)、三者によるディスカッション。

- ③グループ討議「障害の重いこどもを理解するうえで欠かせない視点とは何か」というテーマで6グループごとに話し合い、全体に報告する。
- ④参加者全員による盲体験。
- ⑤「対象の構造にはいった捉え方とは何か」について、当校担当北嶋淳より、事例を通した「構造に入った対象理解の仕方」の提案。
- ⑥「命を守る力を育てる①」として、埼玉県立熊谷養護学校教諭野村春文氏より「呼吸・摂食指導」における子どもの捉え方と方法についての講義。「命を守る力を育てる②」として、当校教諭中村敬子より、「排泄指導」における人間一般から説く子どもの捉え方と指導の仕方についての講義。
- ⑦「外界を把握しやりとりする力を育てる」として、福井大学教授石井麻子氏と「あ」の会子育て研究所長の小川原芳枝氏より「コミュニケーションの指導」についての講義。

(平成19年度)

- ①盲体験。
- ②盲体験を踏まえての「対象の構造にはいった捉え方とは何か」の事例を通した提案。特に対象理解の具体として、まず事実と解釈を区分けし、事実を事実として捉える大事さを示し、そのうえで、看護から援用した全体像の捉え方について、一に「からだ」「こころ」「社会関係」「時のながれ」に分けて事実を書き、それらの事実をつないで理解する大切さと、二に教育上対象の変容を特定する柱を「発達段階」「障害の種類」「健康の段階」「認識・行動の段階」「生活過程の特徴」に分け、それぞれに関わる事実の意味を人間一般に照らして対象特性を明らかにしていく方法について提案をした。
- ③「障害の重い子どもを理解するうえで欠かせない視点とは何か」についてのグループディスカッションとその発表。
- ④呼吸、摂食、排泄、認識活動の向上に関わる具体的な手だてについて全員で体験する。
- ⑤「命を守る力を育てる」として、「呼吸・摂食指導」、「排泄指導」における人間一般から説く子どもの捉え方と指導のしかたについての講義、および指導上の手だての体験。
- ⑥「外界を把握しやりとりする力を育てる」として、コミュニケーションに関わる伝えあいのワーク、引き続きのコミュニケーション指導に欠かせない大人の姿勢についての講義。

以上が大まかな内容である。

この講習会はおおむね好評であり、共通した以下のような感想を得ている。その二、三を記せば、「子どもをどう理解したらよいか分かったような気がします。特殊性に目を向けるのではなく、一般ということを理解していかなければならないと感じました。」「最近、個

別の指導計画で行き詰る思いがありましたが、なぜそうになっていたのかは、構造化にあったのだと思いました。また、個別の教育支援計画では教育と医療とは切っても切り離せませんが、そのなかで教育の立場で知識をつないでいく役割を確認できました。あるいは「その子の今の状態を捉えるために原因を考えることはやってはいっても、『時の流れのなかで身につけたもの』という観点はあまりなかった気がします。時の流れと社会関係の中にいる一人の子ども、という見方ができたような気がします。」などである。

また形式についても、「二日間の講習会でしたが、関心の持てる内容、体験、実技、グループ討議を通しての分かりやすい講習会で、時間が短く感じました。」とよい評価があり、特にグループ討議においては「同じ学校や県内の先生とは違い、さまざまな意見を聞くことができてとても参考になりました」という感想が多く寄せられていた。今度とも、レクチャーがありそれを受けるとという一方的な知識の伝達ではなく、体験、実技、討議を通して、教師自身が自己のあり方に気づいていくことによって発展をはかる形態を工夫し、参加者とともに学習を深めていきたいと考えている。

こうした参加者の感想の中に、講習会の内容について、その学習の継続深化を希望する声が大変強かったため、平成19年度は、講習会の継続学習として、秋と冬に集中学習会を企画した。

(3)については、「今後の研究と方向」に述べる。

##### 5. 今後の研究と方向（まとめにかえて）

一般論をもとに現象を見つめ、構造に踏み込んでいく学問的捉え方は、大時代的なものとして捉える向きもあり、昨今の研究の主流ではないように思われる。しかし、実際に教育現場で適用してみると、教育上の有効な成果が出てくるのを事実で確認することは多い。

現象としては、大きな成長の変化を見定めにくい、障害の重い子どもたちの教育において、「評価システム」と総括されて呼ばれていることからは、それだけでは平面的な提示にとどまり、実際の実践においては十分に機能しないと思われる。それが真に機能するためには、それをシステムの段階にとどまらせておくのではなく、事実—構造—本質の登り下りができる体系化にまで推し進めていくことが必要であり、それにはこうした学問的視点は欠かせないことと考える。

こうした方法を身につけた場合とそうでない場合とでの教育上の有効性を理論的に確認することはこれからの課題としてあるが、その手始めとして、現職教員、看護研究者、教育研究者の三者で、学問的方法論の有効性を確認する共同研究を行なっていきたい。

ここで、看護研究者と共同研究をしていくのは、共通の対象を、生活に基盤を据え、とらえていく分野である看護と比較していけば、教育の姿が浮き彫りになると考

えているからである。

またさらに、研究の範囲を人間一般に広げ、障害児を媒介として、人間の身体論を三者共同で研究し、障害児教育に役立てようとも企画しているところである。

こうしたことを実現するためには、現在の「重度重複障害児の教育評価」という枠組みをもちながらも、そこに新たな枠組みを重ね、障害児教育の実践的指導の体系化をめざす研究を推し進めていく必要があると考えている。(了)

##### <引用・参考文献>

- 立川 博著：「静的弛緩誘導法」 お茶の水書房  
 南郷継正著：「武道と認識の理論Ⅲ」 三一書房  
 薄井坦子著：「看護学原論講義」 現代社  
 瀬江千史著：「育児の認識学」 現代社  
 志垣 司著：「障害児の科学的な実践理論を問う」, 学城第4号, 現代社